

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

大町高校夏合宿・・・②針ノ木古道を辿って五色ヶ原への巻

(2日目:針ノ木谷-平の渡し-刈安峠-五色ヶ原)

船窪谷出合から下は、復活した針ノ木古道の高巻き道を辿る。いにしえ、佐々成政の針ノ木峠越え、また明治11年には日本で初めて(異説もある)の有料道路として開通した歴史ロマンあふれるこの「針ノ木古道」が復活したのは、2007年のこと。手がけたのは、船窪小屋の松沢宗洋さんらのグループだ。この事業は、一昨年「日本山岳遺産」に認定されている。すでに何度も紹介している通り、「日本山岳遺産」には、昨年度我が大町高校の「楯ノ峰」登山道整備事業も認定していただいております、生徒にとっても親近感がある。加えて松沢宗洋さんは大町高校山岳部のOBである。部長のYは昨年度の表彰式で松沢さんともお会いしているし、1年生のMは松沢さんの知己でもある。そんな話をしながら、先へ進む。小南沢を過ぎ、再び沢に下りた。南沢出合でフィックスロープを頼りに右岸へ渡渉。ここまでが「針ノ木古道」。増水の恐れこそないものの、高巻道はそれなりに緊張もし、それなりのアルバイトではある。この先は、黒部ダム関連の関電の補償範囲になっているのであろう、南沢を再度左岸に渡る箇所には、立派な橋と棧道がかかっており、その先は立派な登山道になっていた。やがて安定した広い河原になり、8時50分には平の避難小屋に到着した。船の時間(10時20分)までにはまだ時間があったので、靴など濡れ物を乾かし、船を待つ。

10時5分、渡し場にやってきたのは、関電の下請けで登山道整備をしている大町市内の島崎組の船。なんでも平の渡しの船頭でもある平の小屋主が骨折したので、代替で運航しているそうで、こちらの船頭さんは大町山案内人組合のTさんだった。定員8人の小さいボートなので、2回に分かれての乗船。普段は乗れない船での数分間、風を切って黒部湖を渡る爽やかさに、しばし疲れを忘れた。



島崎組の臨時の船に乗る

避難小屋で休んでいるころから、時に青空が見えたかと覆うと、また降りだすという繰り返りで、カップを脱いだり着たり、なんとも悩ましい天気の中、平の小屋で水分補給をして、10:40分に五色ヶ原を目指して出発する。ここから刈安峠までががんばりどころである。トラバースしながら、徐々に高度をあげ、やがて九十九折れの道にはいるが、先頭に行く部長のYのペース作りは女子2人を気遣いながら、極めて快調である。途中で一本小休憩を入れて、12:10には刈安峠に到着した。しかし、2日間降られ、沢でも濡れ、生徒たちには結構過酷な状況の中での長いだらだら登り。13:00ころだろうか、そろそろ一本取る頃と考えていた矢先、1年生のKが「先生塩ありますか?」と一言。足を攣ったのだ。口にこそ出さないが、他の一年生も厳しい、辛いと目で訴えているのがわかる。おまけにまた雨が激しく降り出した。暫く休み、水分、塩分、糖分を摂らせた後、ゆっくりと歩きはじめる。すでに行動時間は8時間にならんとし、1年生にとっては精神的にも辛いところだ。口数も少なくなり、ただ黙々と歩く。やや視界も開けて

きたので、後ろを振り返ると、眼下遙かな谷底に黒部湖が緑に輝き、それを挟んで針ノ木の深い谷が見える。いつも見慣れている後立山の峰々を反対から眺めながら、「おい、すごいじゃないか。みんなはこれだけ歩いてきたんだ。もう少し行けば、標高も緩くなり、花も咲く別天地が待っている。」と、声をかける。右手には獅子岳から延びる岬々たる稜線が迫ってきた。やがて、五色ヶ原からの水流が流れ始めたかと思うと、その流れの先に五色ヶ原の小屋と色とりどりに主張するテント場が見えてきた。足元のチングルマはもう長い綿毛を風になびかせている。傾斜が緩くなったことや目的地が見えたこととも相俟って、この素晴らしい景色の中で、生徒たちの足取りも心なしか軽くなったようだ。青空も広がってきて、天気ももう崩れることはないだろう。テント場の近くになると木道になり、その傍らにはまだチングルマは花盛りで、一面咲き乱れている。雪融けのわずかな違いが花の時期をこれだけ違えているのだろう。そこここにはタテヤマリンドウ、イワイチョウも。まさに山上の別天地。15:06五色ヶ原テント場到着。途中、避難小屋で1時間半のタイムロスがあったが、濡れた身体での9時間半行動。テント場では、まずテントを始めとして濡れ物を乾かし、しばし思い思いの時間を過ごす。靴擦れの生徒、背負い慣れないザックの重さからくるザック負け、しかし口々に「来てよかった」という生徒たちのことばに嘘はない。

五色ヶ原、ここまでの道が遠く、天候にも恵まれなかった分、その感動も大きい。この天上の楽園で、後立山の大展望をほしいままにして、生徒たちの気持ちが大きく開放されたのを感じず。夕食はキャベツ、ニンジン、ベーコン入りのコンソメリゾット。生徒たちの飯の炊き方もずいぶん上達した。疲れた身体に優しくしみ通っていくメニューが心憎いばかり。寝る前には満点の星がきらめき、心が洗われるような一夜だった。夜半、一時間ほど激しい雨に打たれたが、翌日は朝から素晴らしい天気広がっていた。



五色のテント場で濡れ物を乾かす

山岳部の食糧計画

大町高校山岳部では炊事は基本的には下界と同じ食生活を追求する。なぜなら、食はエネルギー補給の重要な要素であるのみならず、山での楽しみの一つであるということにも気づいて欲しいからだ。そしてそれは自分自身の生きていく力にもなる。したがって、α米やパックのごはん、レトルト製品やジフィーズの類は基本的には使わない。米は生米を炊き、おかずも基本的には一手間、二手間かけることを強めている。1年生の最初の関門は米炊きを覚えることだが、夏休みともなると全員がうまい米を炊けるようになる。米炊きは決して難しいものではない。

今回の合宿のテント場はいずれも水が潤沢に補給できる場所であるので、勢い食糧計画も幅が出る。準備合宿（鹿島槍）のときのこと、担当が挙げてきた食糧計画の中は「冷やし中華」に「パスタ」だった。小生の「何を考えているんだ！」の一言で、却下されたのはいうまでもないが、今回の合宿では、それらが復活し、4日間の食生活もバラエティに富んでいて飽きることがなかった。一年生のTが、今回の合宿の中で、一番楽しかったこととして、3日目のテント場でみんなで食事を作って食べたことを挙げていたのは、そんな指導の結果なのかもしれない。（大西 記）